

苔

池松 孝子

「苔むす」という言葉があるが、苔が生えるくらい長い年月を経たことをいう。『万葉集』には「思ひ過ぎめや苔むすまでに」、また『新古今集』には「こけのしたにいつしか朽ちむ名こそ惜しけれ」と詠まれている。このように伝統的にも悠久の時間を思わせ、それが国歌「君が代」の歌詞になったのだろう。

反対に「転石苔むさず」は、腰を据えて長く一つのことを続けたいと大成しないことをいう。また新しいことに挑戦を続けていく人は年を取らないなど、善悪両面の取り方があるようだ。日本だけでなく海外でもこの対比がよく例に出される。

故郷では年末、親類縁者一統がお墓に集合して「掃苔」する習わしがあった。墓石についた一年の「苔」を取り除き、皆で大掃除、お墓参りをする。

何代の苔むす石が雪の下

正岡 子規

「苔類は最初に海から陸に上がった開拓者のような植物だ」と言われる。進化を考えるうえで重要な意味を持つ。生物で「すべての植物の祖」と習った記憶がある。よって植物の起源を探る手掛かりになるものだ。

胞子で増える原始的な植物には根も花もない。梅雨の頃、苔類から立ち上がる生殖器のことを「苔の花」ともいう。白や紫、赤など、それは小さな花のようなものではないが、正確には花ではない。苔は胞子（生殖細胞）が適度な水分と日光が得られるところに雨、風によって飛ばされ、胞子が発芽発生する。岩など地表が長く放置された所に生える。耕されたり攪拌された所には育たないという。

福岡の官舎では、同じ屋敷内の大家さんが度々見え、ピンセットで這いつくばって庭の苔を手入れしてくれた。幼い子供が庭を傷めるのを見かねたのだろう。

日本には苔の類は2000種以上あり、季語にも苔の花、苔茂る、苔清水などある。しっとりとした色、姿から古くから日本人に好まれた。苔は日本庭園や盆栽だけでなく最近では「苔玉」としてインテリアでも人気がある。あの瑞々しい感じは他の植物には見られない。